

菊をもてあそぶあまり寒霜をふせがんとこのころざしなりととけるやうのひが説もあれば今くはしくときあかしてん後撰集にとなりに住はべりける時九月八日伊勢が家のきくに綿をきせにつかはしたりければ又のおしたをりてかへすとと詞がきありて伊勢の御の歌をまるとり九月八日にとりの菊に綿をきせにつかはすは九日の重陽宴にうつせる香をもてはやさんとてぞ又のおしたその綿をかへすにてもまるとり折てかへすといへるはきくの花にきせたる綿を枝ながら折てかへすにてしかするは道のほどにうつせる香のうすくやならんとおもふころしらびにこそこれを見てまるとりはじめにいへるおのが考のごとくなることを

〔古今要覽稿<sup>時令</sup>〕きくのきせわた、菊に綿きすることは伊勢集忠見集等にはじめて見えたれば其比よりはじまりけるならはしにやあらん正しき行事にはあらざるなり何故に綿をきするぞといへば先菊は仙境にさける花にて延年の功能あるといへるより九月九日毎に菊の露にて身をまめして千とせの齡をのぶるなど祝ごとせしならはしなり九月九日の菊の露よりはひをのべわかへるなどいふならはし有し證は古今六帖異本第一九日貫之ぬれぎぬと人にいはする菊の露はひのぶとぞわがそぼちつる貫之集に延長四年九月廿四日法皇六十賀京極御息所被奉仕時屏風歌菊いかでなほ君がちとせは菊のはな折つゝ露にぬれんとぞおもふ九月九日壬生忠峯がもとより折ぎくのしづくをおほみわかゆてふぬれぎぬをこそ老の身にきれとよみておくれるかへし露ふかき菊をしをれる心あらば千世のなき名はたんとぞおもふ<sup>略</sup>曾根好忠集九月上老にけるよはひもまわものぶばかりきくの露にぞ今朝はそぼつる中務集長月の九日にきくにて面のごひたる人有おいにける身にはまるとりまらぎくの花の名だてになりけるかなこれらにてきくの露にそぼちつればよはひをのぶるといひなら